浪華使夫傳

四

特
入遠13
966
40

大坂府平民

本清

門へ 13
清 966
巻 4

浪花俠夫傳之三

遠州佐夜中山禁鹿　栗技亭鬼卵述

仲間友介馬士となり黒船忠右衛門を給ふ

船越重右衛門危難の話

武庫郡紫雲山中山寺の觀世音霊驗ありなるはしるくて別して
産婦の利益あったなるゆゑに近國近郷大坂及び河州そ敬事同く業なり
然る毎年二月十八日より廿一日まで無縁孤行ゆゑ別して群衆駢集ふぶ
揃のたうりめくなり家よ去れ大道ちの負母負子とび途中あく乱しめんせし
中写友助黒船の忠右衛門よ堀越よ投生を口惜しくもなく共場と支退さ天下
方く流浪して強へ神詣の道不よ加治村とのふゆう此所の馬士となりて
加治長ゑ法と云のうるをのく頭をくきてくやされりう生ゑ千黒船忠

右衛門ふ手いとせめよ逢ぬると無念よ思ひ出會ふハ此恨ハらさんとさま
〳〵と心をはせるよ忠右衛門も今ハ堂しゐよ此ゐとハいくとく健夫の法
ゐ〻こゐるとくなつしらし世出し客易よ仕久〳〵しるなるゐ所節と伺いる
多よ黒舩忠右衛と舩越重右衛門と見ゆるみたりの男ふるふこ
ちるう十右衛つハるゑよ不くゐ二つあり者由へよ世の人落首

出右衛門ゐを他ふとちくろうてみろうとおう十右ふあう

かくのとくよ人のいひちやしゐる程あれハ彼よ忠右ふと新右ふと
人遠へ出入の門遠へあどまくあるゐ十右ふう遠人とのをろ諸
候の奥うと妖婦なうりれバ中山寺の祝の緒と後帯よるしぬれと
新無ふの霊弱まく安産うとうひゐ〻しと勧る人のあうりれハ殿の作

代ふまてお房を人下女を人召連れ舩越十右衛つハ中山寺へ
代参よゆうんと供とも連をび神崎の辺つを来ちりりくよ渡場
ちく加藤長兵衛新右衛門ちつとうて家紋出右衛つなくうと
と思ひ大ふ悦ひ幸ひ手下の者も見へぬを人あれば先年の恨
晴さんハ此附ゐ〻とる士伊賀の長八といふものをきみを渡
さると聞せるるよ中山へ来るよりみをバ屋敷の時名ゐつと馬と
仲ゐいひ合せ法とも志次久々知のとの道まて十右衛つ来かりとる
城馬士ども撲来ちゐ〻十右衛つ良城ちるけ渡よちをハよふ恨
汝〻往還の撲無ハ御制禁ゐふ純更弟力ちるる基よ恵弁の祝
薪ちさしといひるゐ馬士城しにたるしくをハ仲ゐの馬妖たるるく
と取巻弟力とハ事たゐ〻や町人の似士とハ此方よちつるる由へよ渡

あまりに有無云せず打殺せと大勢一同に取巡し事数人
最早了簡なりと刀の柄に手をかけ数人を目当に
大喜の即代森ふ血とたやすくハと心に纏てきぐ〜と似さもしく
力無外とはまども全く某〜似せ某あべき〜心得違の事なれば
此方も了簡いくらあるべ心得ちがひるとまいとをべし〜と流ぶると
引りこし似さむ〜いの正体あ〜ハさと今文了覚もるしハ事おりや
誠のうむ〜いよお遠ゑくハ流くと切ころせと蠅の群る如く取つくゆ我
高ハ人心地もあるべ下女諸ともふるい居けるハ十右衛門婦人の心と素
いうまうみをまく〜のうをんやおりひろれをかわるまやうまるつくん
で逢方ゑし〜ゑ〜我くハ中山へ代森よ流をのまく纏ち婦人どは
そし〜れば其方達とても女連あるものと抜手うハおゑゑげなり〜

其方仲間のもの一人我ふ付て中山まで参べし中己まく駕籠うて
ゑ人の婦人と大坂まで帰し我き人此所へ帰り其方達の存ゑよゑ
重しと事と分くいいりるべ仲間の者ゑる得心して唄さくるハゑ重
くの者ゑまあ〜ば其方六七人の手ゆハゑ者ゑ中己まくまりてうる
うちに其方の仲間の者ゑ皆く呼寄せ置ん夜風竟の通ゆなりしいい
れを長兵衛も手並ハゑ〜ゑれを一人も味方の多ゑんこをよゑんを長
ハと中己へ参〜ける十右衛門大ふ怪び婦人伴ひ中己へ系詰ゑく元の
緒とを記ゑく西人の婦人と駕よのせ大坂へ〜長ハと同道ゑ〜神
崎近帰ゑれば待まふけゑる長兵衛十人の仲間ゑ〜ひ十ちゑ
坂ゑ中ふ取ゑ〜み先ゑ備後の親ゑ〜の急波ゑ人ゑ様道
て打ゑかれば十右ゑ一向覚へゑれば〜ゑ此方ふ覚色人遠

みゝんといふなれも国入など人遣さんに比奥玄格し数十人の馬士でも ほよわて
かゝるべ十右ゑもも是迄なく刀を引抜金限りよ切ゑゝるべ或ハ手負或
切倒され四方へだ〻〻逃散ゆを長ゑ清ゆ右ふ始り已鄭殺して腹いへ
と捧追取ゆ〻おゆゑと手煉の十右清門清ゆ〻有先四五寸切れハ
うんといふく倒ゆゆ比侍とゝ〻〻仲間の悪黨こゆゆゑ〻逃出すべその
儀よ十右ゑハ神崎の浦〻へ矢事来り船よ乗〻んとすると船以械追取
てさんぐよ打〻〻かゝるべ則捨のゆれぬ耶し赤裸ゆゆり刀どはゆゆ〻川〻
ざんぶと飛ぬて向ふとさして游りゆふ不思議や足ふ紐の如きものゝ
引かりて一足も行ぬ〻ぬこれいよ〻其紐を手よ持つく〻見ゆこれ其金
赤いゆゆりのゆやゝかふ仕せ引ゆを紬布ゆゝハ不思議〻〻手ふ持つて渡
渡ゆ岡さ見れハ金百五十両入ゆり十右ゑゆ驚こと今日かゆ

逢ひ又ゆ〻ゆ幸いふ合ふゆ夢よやゆ〻やと心陸ゆく中當所の縣
令此騒動よ捕手數多召連十右ゑ追ゆまた狼藉その動くまゝと
声ゆく〻べ十右清門ゆゆひきゆゆ紀色ゆく某ハ何某屋の家来船越
十右ゑゆと者ゆゆ〻の沢ゆく〻ふ斗口論と彼〻ハ処馬士ゆゆ陸黨
を集喝ゆ待文利不尽よ打かゆり本無接おゆよ〻ハ陸安細ハ手
と負ゆ者ゆと邸吟味下さゆべ〻と詳よ宥ゆれを縣令も十右清
ゆ謝一〻ゆ〻あゆよゆゆ駕よ打のせ大坂へ警固數多ゆゆく送ゆゆ
夫ゆり手負加治長兵清を吟味あゆゆゆ黒船の忠右清門ゆら者
ふ意根あゆゆく人遣ひゆく喧嘩ゆゆゆ返答よ及ゆれだ
ゆゆゆゆ入窪仰せ付れ十右ゑハ始終神妙の取扱ひこと御奏
矣ゆゆあり何某殿へ引ゆゆれゆる夫よゆ十右清門ゆの左中

拾ひし百五十両まで滝川と彰所分け世後に廣く知れて
浮世の沖大ひに悦ひ古今ぶ志ぶ感じ奇

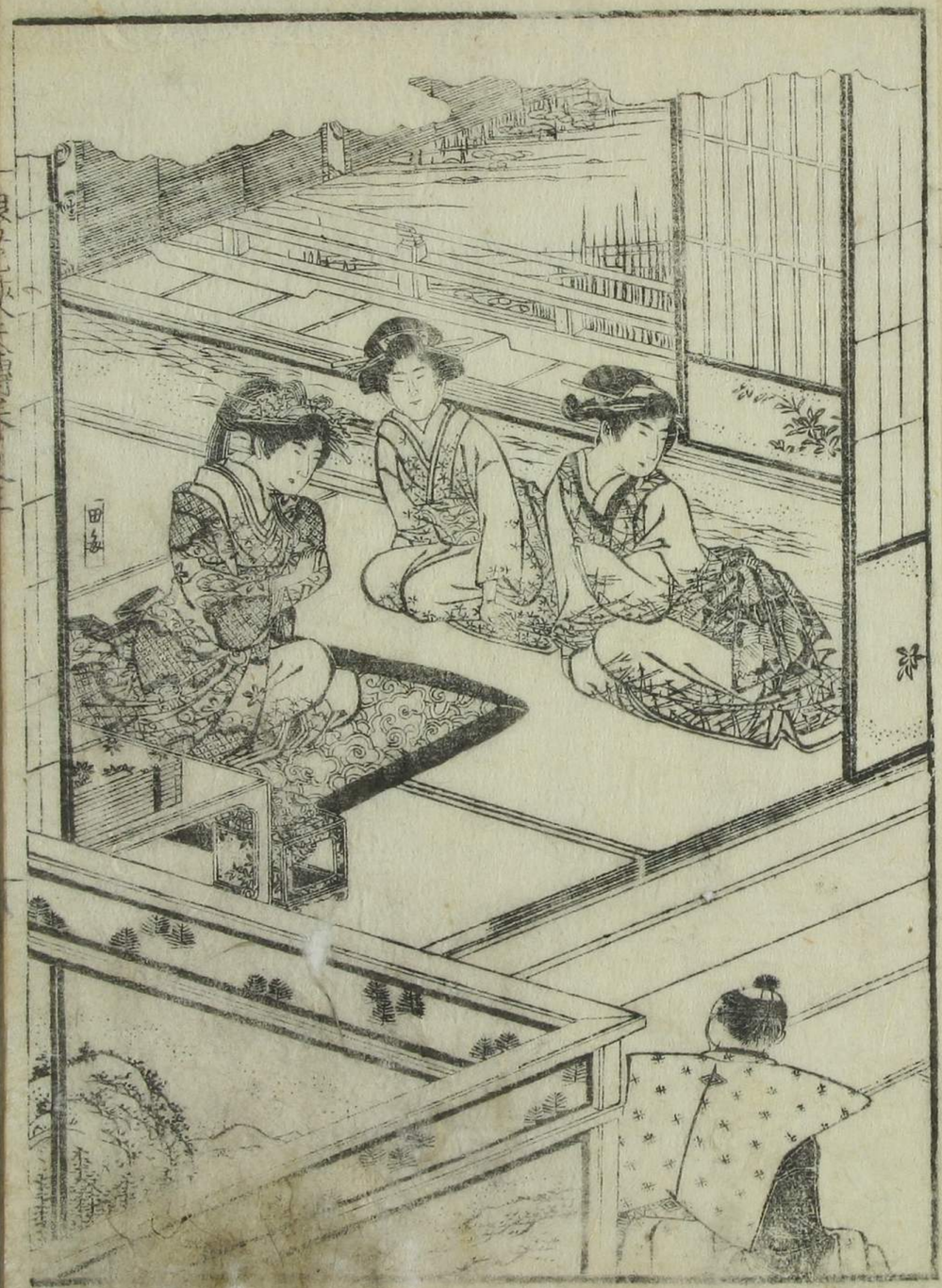
築紫樓六鎌倉へ赴く話

斯て築紫樓六ハ周防の山口より引籠て首領となりて暮しくるが
此頃鎌倉三浦前司義村大名衆賄賂を苛政あり民怨あるに
金銀幾万両まくたくまくるる西国まで隠れ忍ぶ者いとく
金銀をうとんぜあぐるとて手下の者とも十二三人を流よ出立
る貴の道中を如く泊まる幕お西一鎌倉さしていそぎる東海
道関の宿まで来り城本屋といふ旅籠屋よりて暫休へつ
出立せんとする所の刀をけよ掛置し我定紋金ぶ付おさし

大小るー不思義なと所へ我家来の外一人も居間へ来りし者も
あり故詮義して居ハ日数ならんと手下の者ともに聞さ
小取出し者して有ぬ体にて鎌倉へ立旅宿とり泰村の家老牛
尾左膳ふ對面して度旨申入れば早速牛尾の旅宿へ供人あまく引
連来りて樓六ハさも立流ふ出立左膳ふ對面して其事ハ梅津
中将の雑黨倉橋左門と申者し頃日かのふ義ハ某主人中将の嫁三浦
へ婚姻あるーるく此事実誠なるや拙者よ承越実否と糺せしく
るるへ達て下向いたしなり虚実の所委細義り主人へ達し申入為内
く其許と略義なく旅宿迫申据きしう即返答ようり天聽よ達し取
計ふ旨あるとさもむつーく迷ら有投任あるく武く誠よ公家といふとも
恥らぬ勿躰弁舌の濃そるよ急ど者れりとり拵へ事

牛尾ハ只五体より冷汗ばかりを流し居つるが揩手つく頭ばかり
ひそめ此義よつくさて内々情ヲ度子細あり何卒御傷と遠さるゆく
と人と揃ひ成ら〳〵御疑ひの通り若殿荒五郎殿在京の砌別懇
去契結城文出し中将家の御名珍らう親殿試斯むさ柴一人そ元言
志事ままれ何卒足下の御心一つ三浦家おゑ申ふ御引ひ下さる
ほどさやし落面ふ汗を流しく詰りれば撞六ふこのりぶ〳〵ぬるし
面と和げ誠ふ此事ハ一大事と去るぐ〳〵足下し某心を合せ之人中物殿
へ決法ふく取計ひ方もあるべさ方ふ得く思案いとしべしまお共ふ
御帰りあるべし追く此方ふ御返事いとしべしといひれば牛尾ハ何ふ
共家乃御心一つふく大名一家御救ひ下さるなら御勘考下られふ紙
と詞して帰りも野ふ荒五郎殿へ寄り京都梅津家ふ紀しとまく

倉橋左門事〳〵とうり此ふ大殿へ相知とて御家の一大変ふあれば左門く
實とあり〳〵頼置たつ京家の武士ハ金銀と貪ばりふ此度の一件千両二千
両ふハ皆ばし〳〵金子切内〳〵ふく生〳〵粉ふ事成就せんふく色と皆く述
ればば荒五郎殿ハ狂ふ色土のごとく何分其ふ働く金ふハ紙今一万両
二万両入とても宜しく斗ふ重しと宣ひければ牛尾先金子千両と左
門方く生ハし當坐の見まんくひ入りる左門返答ふ以ふと某が心治定つと
ばふ御見まいハ預り重自の返答ふ若殿も牛尾を大ふ悦び給
とのべば金銀ふく納治ばさ申ふと又千両若殿ふ〳〵て見
迫ふ生ハされれば皆ばさく仕戴いふ牛尾殿ふ内々御用ふかいつ
度ふ書状と生しけ紙ふ御扶ふて治心いさつんと収ひ早速ふ
ひとふ〳〵ばし左猪ハ旅宿へ却く



藥紫檀六三千両銘取話

檀六ハ牛尾紙袋文一間ゑ詰じ声とひ共えていひけるハ頃日ようの御心配察し入よりて了簡もあべと思案いろ〳〵とも此事某一人のこゝろ
てゝし下〻の者ども上京の後元沙汰つさべ我身の一大事ふゝ由へ某よ
わさくし甚心痛つさ〳〵くいひ〻ゝ檀六ハ牛尾答へ何乗御家来中へたゞ
つれゝくも送つ御教アるべ御口ゑ下さる御じ中〻ゑ弱けれバ如何ゞ御公附
徳ゝも問く御公附と頂ゝさるべ何ぞ甚陸の口ゑ入ゝ事ハ某べ
自ゝゝひとりんといつまゝ牛尾甚悦ひ御近習ゑ御接ゝ十人へ百両ゑ
進上いさ〳〵〻〻〻あ後して九ハ成程其義ゑべ某よく斗〻ひアべ〻〻
上ハ御心安ゝ某も大殿へ御目見へて姫君御機嫌伺ひのたゝ中ゑ殿ようゝ
某ゑ〻く使よ参ハゝ〻〻〻よるバ孫六殿ゝも誠の姫〻思召さん事疑ひ

あるべうゝ旦田毎を夫ゝを表向ゝく御接嫌伺ひ中ゑ殿御内廟中の
口とともゝよべ〻其時ハ上の返答ゑ我〻ゑ遠ゝ見せよ御合ゝ
ゑ〻べ〻と懇よ教へゝゝゝ牛尾ハ大よ悦ひ初ゝ安堵の思ひをみし
た打殿の御心一つゝく三浦家の納ゝ心ゝあべ何ゝ宜〻〻〻ゝ
ゝゝく之帰郎斗千二百両家来中へとて参〻〻〻日大殿ゝ御前へ
出御目祝後久〻御使ゝ被ゝ雑掌倉橋左門を〻〻御使と
〻〻く中ゑ殿ゝ差越さゝく〻〻ゝ被嫌〻〻ゝれど大殿甚御機ゝん
ゝく早速御目見仰付れ御意の上牧〻拝領物下さん
狩文姫君のゝゝも系ゝ御目見仰ゝれ中将殿御厳中の御口上ゝ
とけゝ骨柄ゝゝ晴今の在五中ゝ〻〻〻奥女中遇と恐〻ゝ田毎
ゝ夫ハ若殿ゝ源ゝ中あれども動なゝせ〻のゝれべ今ゝゝ

うつくしき女つまりなりしかハ動もすれハ人の使
の左門と男ふうの女孤とうつくしく見えれ居りしが絶ざくやあるん
ぶうと父上母君へ申あるさし濃りど認め使ひをもて呼べしとのけく
とうとうく御暇ゝびきれど左門ハ旋帰へ帰りて新敵よりて離小遣
とゝくく姫君より左門へ数くの下されものあるゝ母君への申あ旧届
くとよくくの仰せなりしてて弱よハ帰てゝる指六ハ思ひの侍よ三千
或百あ金ゝと徴ゝとり殺くの生地ともれ紙先ゝさ迫付ゝり田豆い小五
せんと用意ちるがゝるあくも田毎ちを夫が母君へのあといいゝる事とや
ゝつんと用ゝを見れたゝるふゆゝるく君の御姿と見ゝめ者ゝ左ゝ変ひ
こがゝくべ都ハいゝるゝ明よ申住ひゝぞやは鏡を恐ひ生君の申沼を
慕ひ系ゝゝくゝ以ゝ何車御在家とおふ御書残ゝのゝれとのゆみ

ゝれた檀六大いふ驚さ扱く契情ゝど実ゝれりのハあゝかく新蒙耀
の泉のゝあゝるゝ外心あゝハあゝぬゝけとゝ此ゝを火中ゝ書ゝ
バ旅富と云生事ゝ

權六城木屋金助筑助る話

扱ゝも築紫權六ハ思ひの侍よ三千二百両の金子と衛ゝ又ゝ勢州
関の者城木屋金助ゝよ泊りゝ居此城木屋の女房ハ名を小はん
やゝいく美形ゝる婦ゝうけゝび此女房中繁昌して旅人ゝ
者ゝと来る權六ハ前のゝく床の間よ刀どゝ事ゝ並其傍よ伏ゝ
夜半の鐘所ゝよ箸草本も撫入頃床の間の扱教二つよ割白さ手
と出し刀掛のゝけゝ脇差ゝゝ下屋へ又ゝ手拭出ゝ上の刀を

源氏伝夫伝巻之三

そうんとする前を抱うつく手を振り声をひそめ汝何者ぞ
先達て泊つて〳〵せん我定紋付しの大小拵盗ろう今又大小を盗取事大
膽にもいろん誠ふかる事こそ世を危ふく業はあつて此盗ろう人〻皆武
士のうち〳〵只今の如く見付るとそれ忽ち召敷さるべしこうの物よ
ろつく百年の命拵あやまつんの本意あること軽よあるべや向後心を改て
実の世渡り拵るし非業の死をとるべるれ又盗をせどして性はこるべ細
もあくバ色まぢべべし我仕くふかるうひをせんと詞を尽しいさめられば
下郎の男大声拵上て怒出し拵こそ育ぐこれ帝戒すれども詞なう懺悔の
為我身の上拵ひとべし〳〵と暮い豊後の国岡の郡老大道寺玄蕃と
いふ人よ仕られし金助〻者く若気の過りつく姫小まんとやに
者と密通いとせしふ奥るの情を〻西人密よ国を立退るべと漂

泊まく中うく此取よ蘇篭屋高壱貫よ取付うせうよ暮し仕り此家の
亭主よそ〻頃日わのうよ義い汲いう人玄蕃八毒殺よ合て家も改絶
〻し一人の娘はも今八大坂〻く勤先奉公せてくれるれだあるまと其金
を償いき川竹の勤先と歩せ〻せ〻く女房ともあくおぼつるる拵
くとうく〻ふ〻存底の下へ恐び入大ふと盗ろう金子よくいぐ因果の初うく
夜毎よ揚の下へ恐び入盗取ともも何ども中大身ぬ大ふ拵盗ろ〻
あつて八取辱と思召詮義もみく出ろのふと拵のし思ひ是近愛腰〻みく
盗ろうとひ〻ふ今宵君の仁心膳ふめいし〻ふ是近の罪りつぐ〻しふ我を
手ようけ給べ〻〻詞涼〻く言ふ〻れど棹六甚感ど成程大道寺の
故あつて我妻く聞知〻ろ先〻是へよつぶもうく手を取つく引よれべおも
ゆげよ伏姿色白くけちさ男盗ろぐ〻人柄ふあべ棹六程も

討和げ何と思ふ人集ハ紫揚六て盗賊の淵敢ふて吉よ与れて悪業
あうさんぐ甚方如さ小盗と縁よ付ふ可なり名うの小量ふく盗あ生
来ふものふあ必ず向後四と改益とふるれ大道寺の娘の事い我上
方へ出てみべ結ふ討ひゆさせんろ公安く思ふ我も終ふ小ふんふ
意ふよ恥とふをべ是ハ我紀念ふれば海よ事とふう我ふりふん
ハ一遍の面向もをべと著せし橋の役付ふる黒羽二重の羽織とふへ
れば金助ハ海ふ押頂ふ誠よ有ぐ仏教化ふの世よ報ふんと
盗を永ふ大ふ返ふふと勝手ふ行と揚六ふ為海よ譲ふ必返をるれ
急ふく名ふと業作と中ん正流ふふんべし必ふ言合東雲のそふう
打連上方ふふふけふ金助夫婦の者ふけふ人中ふ送りてかつ
ふふふふふふ我是近此業よ改ふせふふ若仕換ふふふ

ふ急命ふのふふふ我身刑罰討ふ逢日毎ふ浅間盗ふ果さんふふふ
向後此道と止ふけふ是働捨六教訓ふ感ふふ

朝比奈義云湯悔異ハ逢ふ諸

義ふ法十帝諸ふふ歌拾谷軍兵湯ふ有家ふ名ふふ吉れふふ
ぞふふく心祇碑ふふ新ふふぐふ峠の藤大和の方ふ拾谷郎兵湯
といふ浪人ふふと角出ふ名字といひ名も似ふれば誠ふんと勇
ふれふ朝比奈義云湯暫思案ふふやく此人歌ふふあぐふ人と討
て立退ふのふの名字と甚似ふ名も似ふふ名ハけぐふふふ我ふ織
ふふくと紀去ふ軍ふ清ふ拾ふべ早迷所ふせふべふふふふ各ふふ同
ど大坂と七ふ比ふ立出ふふふふふふ法十帝押義ふふや日ふ西ふ頂十ふ
ど明日ふふふふふふ人ふふく止ふふふ聞入ふふやく名ふふ事ハ

思ひ立日に於て者えと更に聞へバ例の大膽者なる迫大和をさして急ぐ
なる早ながら峠へさしかゝる頃ハ初更の頃なるをあかりかね雨
ふりしきりに降出し目先も見へざりしを大膽不敵の蔦之浦事ともせず
足に任せて急ぎける小暗峠も過て家の前に向ふに傀火かさしあり其火
の光を見れバ三十計の女の鉄漿黒く髪ふりみだし白き帷子を着て色青ざめ
ながら恐しき首を引提てぞ立たる形あたかも此世のものならねバ
魂も天外に飛ばさるも強勇の蔦之浦なりしも恐れず近づき進んで
見れバかの女提たる首を蔦之浦を目がけ投付たるに不思義や此首
火焔を吐かけ蔦之浦に向ひかゝるを其首を八眼もかけず左の幽霊ふらひ
もんどりて組ぶれて叫んで身を縮めしゆゑ返されけびかゝる蔦之浦馬をさく引
伏己なくさ若る往来に出て夕月の煙失せなし諸人をまやしんて定

く子細あるべし真すぐに白状せよと突捨伏ければ女ハ涙ながらさてハ御身
の如き勇猛の人を今まで見侍らねど我身事ハ河内のかくの摂ずに住む
盲人兵八助といふ者の女房なるが夫兵八助八日ばかりさきんくむ其上頃日
大病なれバ今ハ立るかとなき身に此上人参なくて八助命叶ハねバとて医師の
すゝめし由人道ならぬ事とハ存ながら旅ゆく人をおどし衣とる夫ひのす
くとの懐中のものを奪とり夫を育てんとなり誠に貞の道とハえいひがたし
とき見くし浅ましけれど義気盛んの蔦之浦大に感じて越そしかが細さを
の身まく夫が思へど今此山中に只一人あるりもの業なるをも大
の命を助んと思ふ一筋の心よりかれを悼さにあらば不便の事なりと懐中
より金子一両取出し是をもつて人参代調へ看病いたすべしまもりの
とさて万一狼唄者あらバ一刀に切殺されば何者が看病せん必く今宵

伊勢うの女房

よりて此事と止るべし我ハ大和路へ心ざせバ是より急ぐぞ早く帰られよと云捨て
立去れバ大和なる狄谷伊兵衛と為るるに敵きの悪けあらハ能似てごゝろさし其
人なるもあらぞ言葉も通ぜざる程なる此人ハ年久しく此所にて鍼術の指南いたせしよし
なれバ我も此人にあらんと思ひ入て夕ぐれの所を去て不便の女を按摩と河内路へおもひ来るがたゞこ
の火焼かゝりし是ぞ家に立寄茶を一つといひ入りけれバ主ハ盲目にすぐ女房
ハいとうつくしき女なるが御心易き事なりし火打入茶をさし出しぞ茶を誘
不審に思ひ平がなが主人の仮名ハ兵助殿とハ申さずやと尋ければ
そ然なれど私が兵助とやらく近年盲人となり按摩を渡世にいたすと云
者なるハ情深きやと尋ねバ然れど兵助女房なくば狂人といふ者なれバ
夕辺の女なれハ似も似つかぬ若き女清まつる日兵助どのゝ名ハ持病気と聞つるが
病快中しいひけれバ兵助いやく眼病後ハ達者なく近頃ハ風もひく